

和光大学学生の価値観と ユニバーサル化時代の大学の在り方

野中浩一 NONAKA Koichi

-
- はじめに
 - 対象と方法
 - 結果
 - 考察

【要旨】和光大学の身体環境共生学科（W 学科）は、多義的な共生概念を重なるの中心におきつつ、身体・健康、自然・環境、文化・生活の3つの柱を軸にした、幅広い教養を土台にする教育の場を目指して2007年度に創設された。保健体育教員資格を目指すそれまでにない資質の学生も多く集まり、すでに数世代が社会に巣立った。和光大学という「自由な研究と学習の共同体」を目指す場のなかで、卒業生たちはどう育ったのかを検証する必要がある。本論文では、進行中のW 学科卒業生調査のなかから、どのような価値観をもつ学生だったのかを、在学生や世界価値観調査のデータと比較検証しつつ、和光大学という場にふさわしい資質がどのようなものを模索した。W 学科卒業生120名のデータは代表性に課題があるものの、自らの人生を自分自身で決めたいという価値観をもつ学生たちが、自由な環境のなかで異質な他者と触れ合うことで成長する例もある。単なるL 型大学を目指す視点だけでは不足しており、未分化の学生たちが模索する場の重要性を示唆した。

—— はじめに

日本の四年制大学進学者割合は、2014年の時点で49.1%と世界の29位である（OECD 2016）が、オーストラリアの93.6%を筆頭に、大学という高等教育機関で学ぶことが、多くの国で同世代人口の過半数、すなわちマジョリティとなっている。日本でも短期大学などの高等教育機関を含めれば62.4%が高等教育を受けていると報告されている（OECD 2016）。トロウ（1976, 2000）の言ういわゆる大学のユニバーサル化が進み、もはや、大学進学者数がこれ以上大きく増えることはなく飽和状態に近い。日本では少子化のなかで出生数が減少しつづけ、受験生人口は減り、しかも、大学進学割合が今後顕著に増えることはないだろう。すなわち、同世代人口のうちに占める大学進学者は減少することになり、これまでの定員を維持できない大学も増える。

ユニバーサル化時代の大学にあっても、エリート大学はこれまで大学が担ってきた、社

会の次世代のリーダーたちを育成する役割を担い続けるであろう。少なくとも、そのように期待される。しかし、その一方で、ノンエリート大学では、その存在意義がより厳しく問われることになる。社会のニーズに合わせた人材育成という形で、多くの大学では学部学科の新設や改編が盛んに行われている。そのひとつの目玉は資格の付与であり、それぞれの専門職に就くための土台を教育するという明確な目的があるから、大学受験生本人やその親（保証人）に対する説明責任を、一見すると果たしやすい。

そのようななかで、新しい学部学科の理念が語られることはあっても、旧学科の意義についての評価が表に出ることは少ない。しかし PDCA サイクルを考えるなら、旧来の学科についての評価（C）は不可欠であろう。

和光大学では、2007 年度から身体環境共生学科（以下、W 学科と略す）という、それまでになかったコンセプトをもつ学科を設置した。これは同時に設置された学科が、既存の「～学」の名称を示すことで、その教育分野が明確にされたこととは対照的なものであった。W 学科は「共生学」という名称を含むが、そもそも共生学が確立された学問分野と言えるかどうかには疑問もある（野中 2010）。W 学科の理念は、多義的な共生概念を重なりを中心におきつつ、身体・健康、自然・環境、文化・生活の 3 つの柱を広く学ぶ、というものである。W 学科では、中学・高校の保健体育教職資格を取得できる課程が設けられているが、入学者全員がそれを目指すための学科ではなく、基本的には幅広い教養を身につけることが期待され、エリートというよりは中核的市民の育成に主眼がある。

和光大学そのものも、初代学長、梅根悟の明確な理念のもとに 1966 年に「小さな実験大学」として誕生した（梅根 1975）。「自由な研究と学習の共同体」という当初からの理念は、現在も掲げられている。大学自体の歴史的評価も必要であろうが、とくに印象的なのは、初期の卒業生たちのその後についてインタビューで追跡した石原（2001-2002）の調査である。この特徴的なアウトカムスタディは、実験的取組みの評価には相応しい試みだった。同様に、他のどこにもない名称とコンセプトをもった W 学科にどのような意味があったのか、あるいはなかったのかの評価には、とりわけその場を通過した卒業生たちの一次評価によるアウトカムスタディが求められる。

大学という教育の場を考えると、どのような才能がどのような環境で開花するだろうか、という視点は欠かせない。言い換えるなら、あらゆる才能にふさわしいひとつの教育環境というものはなく、それぞれの才能に応じた環境をつくるべきということでもある。それは裏を返せば、一定の教育環境においては、それにふさわしい才能が集うことが望ましいということにもなるだろう。

著者は、和光大学とくに W 学科には、限られた割合であっても、人口全体のなかにその環境を必要とする学生候補たちが存在すると考えてきた。ノンエリートとはいっても、共生を謳う学科から巣立っていく卒業生たちは、これからの社会を中核で支える人材として必要ではないか。しかし、万人に向いた環境でないとするれば、向いている学生とはどのような特性をもっているのか。本研究のきっかけはその問いにある。もちろん、現在の在学

生、卒業生たちにとって和光大学が最適の環境だったかどうかは断言できないし、一方で、まだこの場の価値が社会に知られていない可能性もある。現実には大学の環境が変化し、本来求めていた環境が得られずに失望した入学生たちがいる可能性もある。しかし、少なくともその環境に向いた特性をもった学生がいて、この場で成長できたのであれば、今後目指すべき方向の手がかりは得られるかもしれない。

本論文では、上記のような問いを考える第一歩として、W 学科卒業生に対して実施している調査のなかから、人生観、仕事観を中心とした価値観の特性を、和光大学の在学生や、対照となる調査結果と比較しつつ検討することを主たる目的とした。その上で、卒業生との対話も参照しつつ、今後の大学のあり方について考察する。

——対象と方法

1. 卒業生調査

卒業生調査は、郵送による質問紙調査と、許諾が得られた対象者に対する個別インタビュー調査の2段階で実施している。対象者は、和光大学現代人間学部身体環境共生学科に入学または編入学によって在籍したことがある人たちである。卒業生調査と略すが、厳密には、中退者・除籍者も調査対象母集団として想定した。

① 質問紙調査：調査は2015年10月から開始し、2007年～2011年入学者については、在学中に把握できていたメールアドレスにはメールで、facebook と twitter のアカウント名の検索から W 学科卒業生と判断できる対象者には、調査意図の概要と回答依頼のメッセージを送り、送付先住所を知らせてくれた対象者に調査票を随時郵送した。2012年入学者に対しては、調査期間に卒業証書交付の時期が含まれており、その機会に依頼文とともに質問紙を封書として個別に手渡し、回答を依頼した。質問紙調査は回答者の意思で記名をお願いし、返送された回答は、氏名、住所、連絡先などの個人情報に記載された箇所と回答冊子本体とを切り離し、連結可能匿名方式で別個に保管した。質問紙の内容は、在学中に印象に残った授業や、通学頻度、アルバイト、学内の居場所、和光大学や W 学科への評価などであるが、今回の分析には、以下に述べる世界価値観調査に基づく価値観調査にかかわるデータを用いた。

② 個別インタビュー調査：調査票送付時に、個別インタビューの可否を尋ね、可としたものから随時、原則として単独で、最大でも3人1組で個別インタビューを試みた。場所は大学研究室、学外飲食店などであり、プライバシーが維持できる環境で、それぞれ1～3時間ほどで行った。当人の理解を得たうえで録音記録し、事後的に再生しながら必要に応じて内容を確認した。質問内容は、「卒業（あるいは中退など）以後の仕事や暮らしの現状」「和光大学や W 学科を志望したきっかけ」「在学中の環境および自己評価」「和光大学の特徴をどうとらえているか」「自分の子どもや知人に本学、もしくは本学科への進学を勧めるか」「今後も W 学科や和光大学は存在する意義はあるか」といった項目を基本的質問と

して設定し、特別に記述による返答は求めず、自由に語ってもらった。本稿ではこのインタビューの包括的分析までは踏み込まず、一部の事例を示すにとどめている。

卒業生調査の現状を表1に示した。2007～2012年度までの5年間の入学・編入学者総数は378名、中退・除籍者数は63名（17%）で、コンタクト先が判明した者が242名（64%）、アンケートを送付・手渡しできた総数が173名（46%）、アンケート回収総数が120名（対象者総数の32%、コンタクト数あたりで50%）であった。W学科卒業生はこの120名のデータを用いた。

2. 世界価値観調査と在学生調査

世界価値観調査（WVS: World Values Survey）は、1981年に開始された、世界の国々の様々な価値観と、それが社会生活や政治生活に及ぼす影響に関する調査で、社会学者たちの世界的ネットワークが実施している。数年単位で実施され、現在、第6回までの調査が2014年に終了している。

上記の卒業生調査では、この世界価値観調査の日本語版について、その一部の質問項目を質問紙調査に含めることで、今回の対象者たちの価値観を検討した。さらに、現在のW学科在学生、他学科の学生たちにも同様の調査を行うことで、比較材料とした。在学生については担当教員の協力が得られた複数の講義で説明後、その場で匿名記入を依頼し、回収した。在学生の対象者数は、心理教育学科12名、現代社会学科68名、身体環境共生学科（W学科）95名、総合文化学科28名、芸術学科5名、経済学科40名、経営学科31名の合計279名であり、在学生を身体環境共生学科95名とそれ以外の学科184名の2群にまとめて結果を示した。

なお、毎回問われる質問項目ばかりではないので、日本人の価値観の時代変化を確認できる項目は限られている。以下、この世界価値観調査結果を引用する際には、WVSあるいはWVS（1981）などと調査年を添えて略称する。今回の比較にあたっては、出版されている結果の年齢区分が～29歳までの青年層のものを対照として使用したので、ここで示している数値は日本の全年齢の結果ではない。本稿では男女の区別はしていない。

表1 卒業生調査の概要

（2016年11月8日時点）

入学年度	入学・ 編入学者 数	中退・除籍者		コンタクト		アンケート送付		アンケート回収			インタビュー	
		数	%	数	%	数	%	数	%	（全体） （コンタクト）%	数	%
2007	59	8	14%	36	61%	20	34%	19	32%	53%	10	17%
2008	65	9	14%	39	60%	27	42%	20	31%	51%	12	18%
2009	57	12	21%	36	63%	16	28%	13	23%	36%	7	12%
2010	80	17	21%	48	60%	38	48%	30	38%	63%	14	18%
2011	58	11	19%	34	59%	22	38%	21	36%	62%	15	26%
2012	59	6	10%	49	83%	50	85%	13	22%	27%	1	2%
非回答								4				
合計	378	63	17%	242	64%	173	46%	120	32%	50%	59	16%

——結果

W学科卒業生・和光大学生の価値観と世界価値観調査との比較

1) 自覺的健康感、幸福感、生活滿足度

自覚的健康感、幸福感、生活満足度に関する比較結果を図1に示した。

WVS での自覚的健康感の結果は、「非常によい」との回答が 1981 年の 13%から 2010 年の 27%に増加傾向を示し、「よい」を合わせると 2010 年には 64%に達している。和光大学の在 student と卒業生もほぼこの 2010 年と同じ割合であり、W 学科卒業生にはやや多い傾向があるものの、「よくない」との回答は 10%あり、WVS と変わらない (図 1a)。

WVS での幸福度も自覚的健康感と同様に増加傾向にあり、2010 年には「非常に幸せ」が 20%に達している。和光大学の他学科在学生はそれより低めで、「あまり・全く幸せでない」も 2 割近くあるが、W 学科は卒業生も在学生も「非常に幸せ」の回答が多く、4 割を超えていた (図 1b)。

生活満足度（図 1c）も、1981 年から 2010 年にかけて満足度が高くなる傾向があり、1（不満）から 10（満足）の 10 段階評点の平均値は、WVS では 6.5→6.4→6.8 となっていたのに対して、W 学科卒業生では WVS と同等の 6.8、W 学科在學生は 6.9 であり、他の学科在學生は 6.3 とやや低かった。

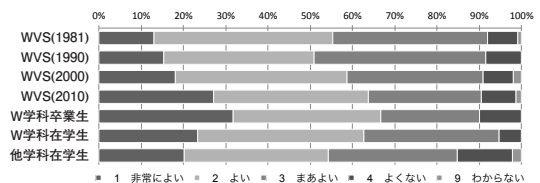
2) 人間観、人生の目標、人生観

人は信用できるかという問いでは、WVS では 1981 年～2000 年にかけて、ほぼ 4 割が安定して「だいたい信用できる」と答えていたものが、2010 年には 30%にまで低下している。和光大学の学生たちは、卒業生、在学生を問わず WVS (2010) とほぼ同水準であり、W 学科在学生在がやや高い傾向はあるものの、一般よりも他人を信用して生きている傾向があるわけではない (図 2a)。

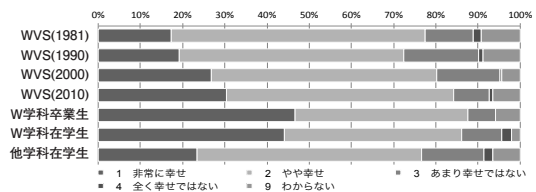
同様に、他人が基本的に公正な態度をとるかという問いでも、WVS (2010) の結果と比べて、和光大学生が「他人が公正な対処をする」とは考えていない傾向があり、とり

図1 自覚的健康感、幸福度、生活満足度

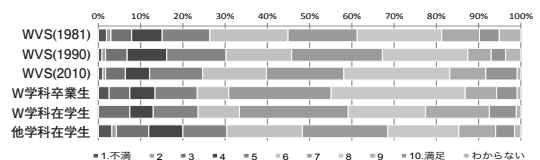
a 全体的にいて、あなたの現在の健康状態はいかがですか。



b 全体的にいて、現在、あなたは幸せだと思いますか。それともそうは思いませんか。



c 全体的にいて、あなたは現在の生活にどの程度満足していますか、あるいはどの程度不満ですか。



わけ W 学科卒業生と他学科在學生に
関しては低めである (図 2b)。

人生の目標をどのように考えるか
に関する 4 つの問いの結果を図 3 (a
~d) に示した。WVS の回答に比べ
て、和光大学生には違いがあり、そ
のなかでもとりわけ W 学科卒業生
はその違いが顕著になる傾向があっ
た。すなわち、「親が私を誇りに思え
るように努める」に「賛成」以上の
割合が、WVS と他学科在學生では 5
割程度であるのに対して、W 学科で
は卒業生も在學生も 6 割を超えてい
る。「友人の期待に応えるよう努力し
ている」に「賛成」以上が、一般に
は 44%であるのに対して、他学科在
學生も含めて和光大学生は 6 割前後
になる。一方で、「他人に迎合するよ
りも自分らしくありたい」は一般と
他学科在學生では 25~30%程度なの
に対して W 学科の卒業生と在學生で
は 4 割前後と多く、「自分の人生は自
分で決める」に「強く賛成」の割合
も、一般と他学科在學生では 5 割未
満なのに対して W 学科の卒業生と在
學生では 6 割を超えていた。

「人生を思い通りに動かすことがで
きるか」(図 4a) という問いでは、
WVS のほぼ 10 年ごとの動向をみる
と、2000 年までは「自由に動かせる」
という方向に変化していた (6.1→6.2→
6.5) が、2010 年には 6.1 にまで低下
していた。他学科在學生では 6.1 と
WVS と同水準であるが、W 学科の学
生には高く、W 学科在學生で 6.5、
W 学科卒業生では 7.1 であった。

図2 他者に対する認識

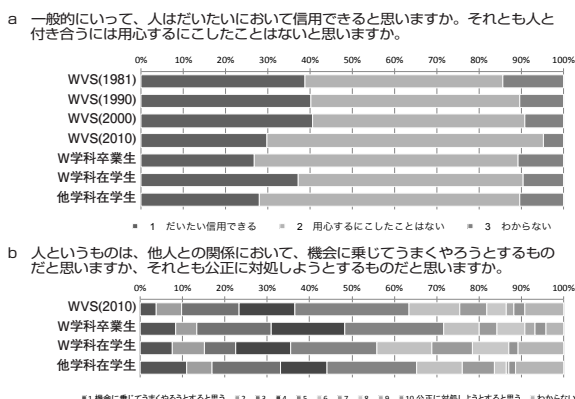


図3 人生の目標

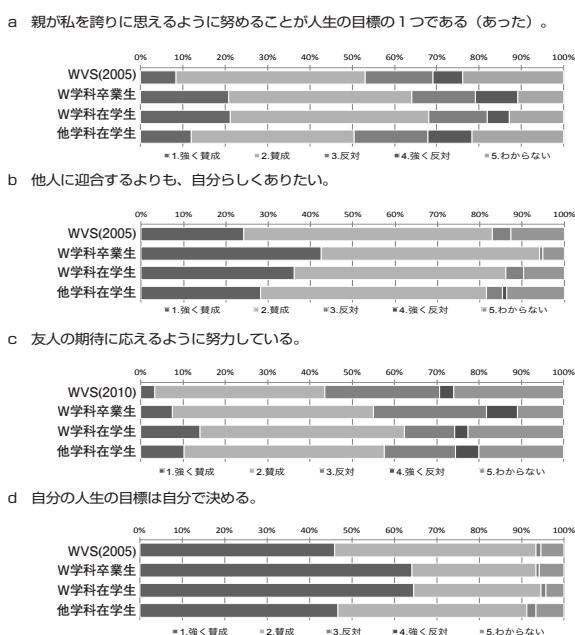
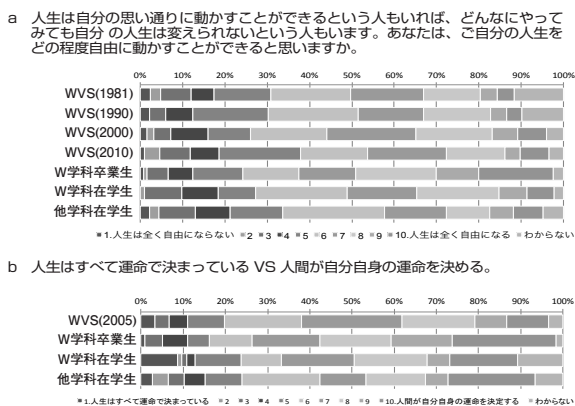


図4 自由と運命でみた人生観



「人生はすべて運命で決まっているか、人間が自分自身の運命を決定するか」(図 4b) という問いは本来、根底に宗教的信仰の存在を想定したものであろう。しかし日本ではほぼ、前の問いと同じ傾向を示すと予想され、実際、W 学科卒業生の平均得点が 7.6 と高かったが、W 学科在学生は一般と同程度に低く (6.8)、内訳をみれば、とくに「人生はすべて運命で決まっている」という回答が 95 人中 8 人と多かった。

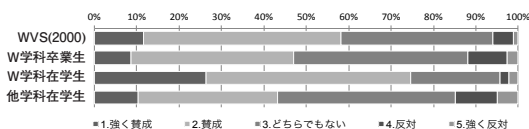
3) 仕事で重要なこと、仕事観、労働観など

WVS では 1981 年から 2000 年にかけて、仕事に重要と考える要因のほとんどの項目で、重要と回答する割合が増えていた (図略)。2000 年の段階のそれと比較して、和光大学生の結果はほぼその延長上にあった。WVS (2000) で 8 割～9 割が重要と考える項目には、「自分の能力に合った仕事」「給料がよい」「失業の恐れがない」「好ましい休暇制度」「面白い仕事」があり、和光大生もほぼ同様であるが、W 学科卒業生では「給料がよい」「失業の恐れがない」はやや低めで、「面白い仕事」は 9 割が重要と考えていた。また、一般に 6 割～8 割が重要と考える項目には、「何かを成し遂げることのできる仕事」「好ましい勤務時間」「心理的圧迫 (プレッシャー) がかけられない」「責任のある仕事」があり、W 学科卒業生・在学生はほぼ同水準で、これらについては他学科在学生に特徴があった。すなわち、「心理的圧迫がないこと」はより重視し、「何かを成し遂げる仕事」「責任のある仕事」については重要でないとの回答割合が多かった。WVS では重要であると回答する割合が相対的に少ない「独創性を発揮できる仕事」「世間から尊敬される仕事」については、W 学科在学生が重視している傾向があった。

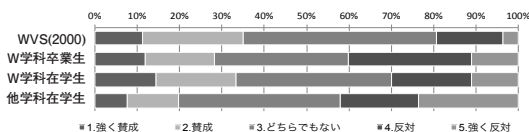
「才能を発揮するために職が必要」という意見に賛成なのは WVS では 6 割程度であり、これに対して他学科在学生と W 学科卒業生では 5 割未満と、有職志向は相対的には少なかった。ところが、W 学科在学生では逆に、一般より有職志向が強く、賛成が 7 割を超えていた (図 5a)。概して言えば和光大学生は不労所得に対して「恥ずかしい」と考える割合は少なく、とくに他の学科在学生では顕著 (2 割) である。W 学科卒業生では

図5 仕事観

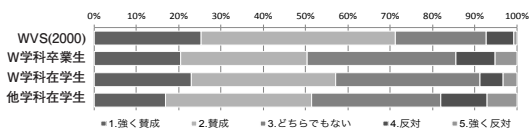
a 才能を十分に発揮するためには、職を持つ必要がある。



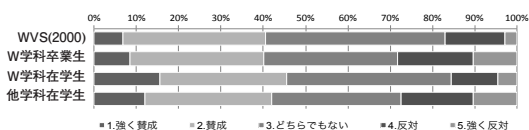
b 働かずにお金を得る事は、恥ずかしいことである。



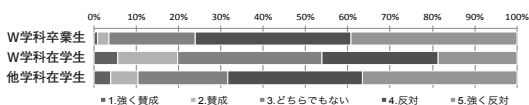
c 人は働かないでいると怠情になるものだ。



d 働くことは、社会に対する義務である。



e たとえ余暇時間が減っても、常に仕事を第一に考えるべきだ。



「反対＝恥ずかしい」が3割ある（図5b）。WVSでは7割が「人は働かないでいると怠惰になる」と回答しているが、和光大学生ではいずれも6割未満である（図5c）。「働くことは、社会に対する義務である」に賛成する割合は、WVSと和光大生に大きな違いはない（図5d）。余暇よりも仕事優先に賛成なのはW学科在學生で2割、他学科在學生で1割、W学科卒業生でさらに少なく5%程度である。W学科卒業生や他学科在學生で反対が7割前後であるのに対して、W学科在學生は反対が4割強と少なかった（図5e）。

4) 国家観、共生観などにかかわる項目

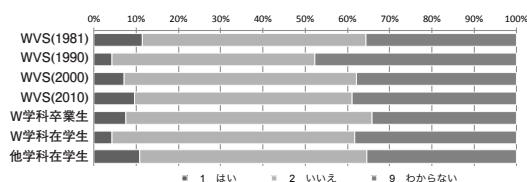
国のために戦うかという設問は、諸外国と比べて日本人全般として「はい」が少なく、和光大学生でも高々1割であった。この項目に関しては、和光大学生とWVS（2010）の結果に違いは認められない（図6a）。

これに対して、日本人としての誇りは、WVS（2010）では「非常に感じる」が2割、「かなり感じる」を加えると過半数が誇りを感じている。他学科在學生ではそれと同等かやや少なめであるが、W学科の学生では卒業生、在學生とも、「非常に感じる」が3割前後、「かなり感じる」を合わせれば6割程度が誇りに感じていた（図6b）。この設問は「日本国民」としてではなく「日本人」としてと表現されていることに注意が必要である。

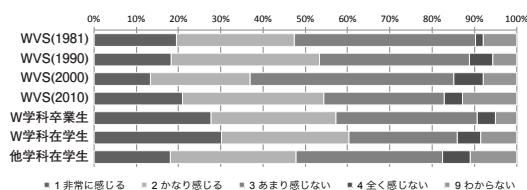
国民の暮らしに国が責任をもつべきか、それとも、個人の責任かという問いに対して、WVS（2000）では4.3だった平均点がWVS（2010）では3.8まで低下している。これは、より国が責任をもつべきだという意見が強まったことを意味している。それに対して、他学科在學生では5.1と高く、さらにW学科では卒業生が

図6 国家観、共生観ほか

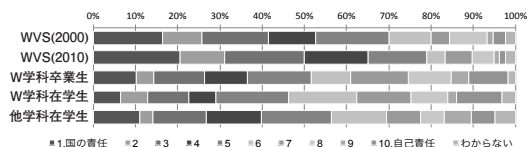
a もう二度と戦争はあって欲しくないというのがわれわれすべての願いですが、もし仮にそういう事態になったら、あなたは進んで国（日本）のために戦いますか。



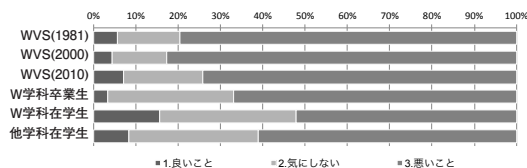
b あなたは日本人であることにどのくらい誇りを感じますか。



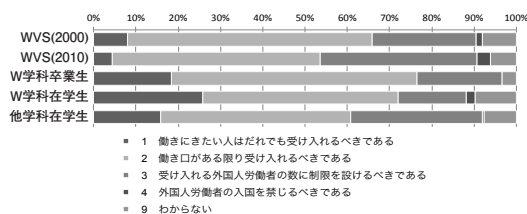
c 国民皆が安心して暮らせるよう国はもっと責任をもつべきだ vs 自分ことは自分で面倒見るよう個人がもっと責任をもつべきだ。



d 権威や権力がより尊重される。



e あなたは、日本に働きにくる外国人労働者について政府はどう対応すべきだと思いますか。



5.4、在学生が5.6とさらに高い。すなわち、和光大学生は概して「自分のことは自分で面倒を見る」と考えていて、W学科ではその傾向が顕著であった(図6c)。

WVSでは「権威や権力が尊重されること」に対して8割前後が「悪いこと」と回答し、2010年でも74%が否定的であり、諸外国より高い。それに対して和光大学生は6割程度にとどまっている。ただしそれは「気にしない」という回答が多いためであり、積極的に「良いこと」とするのはW学科在学生がやや多い程度である(図6d)。

外国人労働者の受け入れに関しては、「誰でも受け入れるべきである」という回答は、WVSではきわめて少なく、2000年でも8%、2010年にはさらに少なくなって4%であり、「働き口がある限り受け入れるべきである」を加えても、66%から54%に低下している。それに対して和光大学生は2割前後が「誰でも受け入れるべきである」と考え、とくにW学科では、「働き口がある限り受け入れるべきである」を合わせれば7割を超えていた(図6e)。

—— 考察

1. 和光大学生の価値観調査のまとめ ～ W学科卒業生、W学科在学生の特徴

今回の結果から、W学科の学生には以下のような特徴があると推測された。

- 1) 自覚的健康感も生活満足度も、とくに高くはないが、幸福感は高い傾向がある。
- 2) 他人への無警戒な信頼感が高いわけではない。
- 3) 仕事観に関して、W学科卒業生では「給料がよい」「失業の恐れがない」を重要と考える者の割合はやや低めで、「面白い仕事」を重視する。「才能を発揮するために職が必要」という有職への価値意識は、W学科在学生で高い。不労所得について「恥ずかしい」と考える割合は少なく、W学科卒業生では「反対＝恥ずかしくない」が多かった。「人は働かないでいると怠惰になる」についてもW学科卒業生・在学生は一般より賛成が少なかった。しかし、「働くことは、社会に対する義務である」に賛成の割合は一般と差がなく、W学科在学生にやや高いだけだった。
- 4) 自身の人生のあり方として、「親が私を誇りに思えるように努める」「友人の期待に応えるよう努力している」「他人に迎合するよりも自分らしくありたい」「自分の人生は自分で決める」に賛意を示す割合が高かった。また、「人生を自分の思い通りに動かせる」と考える割合が高く、W学科卒業生では「運命は自分自身が決める」と多くが答えていたが、W学科在学生では、逆に「人生はすべて運命で決まっている」という回答が目立った。
- 5) 「戦争になったら国のために闘う」と答えた割合は、一般と同様に低かった。一方で、「日本人としての誇り」はW学科卒業生・在学生とも感じている割合が高かったが、国の責任ではなく「自分のことは自分で面倒を見る」と考える割合が高く、W学科ではその傾向が顕著であった。
- 6) 外国人労働者の受け入れについては受容的である。一方で、権威や権力が尊重される

かについては、一般と比べて「気にしない」が多く、積極的に「良いこと」とするのは W 学科在学生がやや多い程度であった。

以上をさらに要約すれば、平均的にみた W 学科卒業生は、「自分らしくありたいと考え、自分のことは自分で面倒を見ながら、自分の人生は思い通りに動かせると考える傾向があり、日本人としての誇りをもちながら、外国人労働者の受け入れには寛容」という特性がありそうだ。

W 学科の学生たちの特性に寄与している 1 つの要因は、入学定員の半数もしくはそれ以上の学生が保健体育教員資格の取得を目指して入学していることだろう。この資格課程は 2006 年以前の和光大学には存在せず、従来は居なかった属性の学生たちも進学しているものと考えられる。それにもかかわらず、今回の W 学科卒業生たちの回答からすると、和光大学の自由な環境を好む傾向は維持されているように思われた。

ただ、そうした W 学科の学生たちの価値観にも変化が感じられる。現在の W 学科の在学生では、W 学科卒業生と比べても「権威や権力が尊重される」「尊敬される仕事」「余暇よりも仕事第一」といった設問で他より賛成がやや多く、「働くことは、社会に対する義務である」への賛成も多い。「才能を発揮するためには職をもつ必要がある」という有職志向が高いことも、教員という資格取得が将来の職と強く結びつけられているのかもしれない。しかし、現在の W 学科在学生で「人生はすべて運命で決まっている」への賛成割合が高くなっていたことが、現状での自己能力の悲観的評価を示しているとしたら、偶然の出会いによって資格をもっと活かす道を考えたり、新しい生き方を模索したりする潜在的なチャンスを抱きそこなう危惧もある。

2. 潜在的資質と環境

人間のさまざまな性質や行動が何によって決まるか、という問いについて、氏か育ちか (Nature or Nurture)、すなわち遺伝か環境かという問いに還元する考え方がある。いわゆる双生児研究法の基本となるテーマでもあった (安藤 2014)。教育という視点で見れば、たとえば知能の遺伝率の過半が遺伝で決まっているという結論が得られれば、それは教育の無力さという短絡的な考えにつながるおそれもある。極端な場合には優生思想にもつながりかねず、研究そのものが警戒的に見られることもある。しかし、最近の研究では、遺伝的背景が同じであっても環境の作用によって結果としての現れ方が異なるという、遺伝環境相互作用が注目されている。すなわち、それは教育の分野にも諦念よりは希望をもたらすことになる。まして、大学という教育の場で念頭に置くべきことは、「遺伝」というより、20 年近く成長してきた後の青年たちの遺伝的背景を含む「資質」であり、そうした潜在的資質 (個性) が環境によってどのように顕在化されうるのかという観点に立たなくてはならない。

3. 和光大学が目指してきたもの

梅根 (1975) は和光大学創設当初の学長講話のなかで、望ましい学生像について言及している。梅根は、当時の大学生を3つの類型に分けた。「フラリ型」と称する第1の類型は、「高等学校を卒業すると多くの諸君が大学に入るからおれも入ってみようか、何年間か暇があって遊ぶには、大学というところはまことに恰好のいい遊び場所であるから、まあそこで遊ぼう、というような気持であっさり入ってくる諸君」というものである。それに対して「卒業型」という第2の類型は、「入れる大学に入って、なるべくならいっしょうけんめい勉強して、少しでもいいところへ就職をしようという諸君」である。そして梅根が好ましい大学生の資質として記述している第3の類型が、「自分の学びたい教師を捜して、その教師の居る大学へ入って、その教師について鍛えてもらうという考えで、大学を選び、学科を選んでいる青年」ということになる。

梅根が求めた第3の類型の学生は、現在ではほとんど見かけないようにも感じられる。今回の卒業生インタビューでも、特定の教師に師事して学びたいから入学したと答えた学生はほとんどいなかった。しかし梅根の時代であっても、第1、第2の型の学生のほうが大半だっただろうし、実際にはそうした学生たちも、さまざまな偶然の出会いによって、第3の類型に変化した例があったはずである。入学後に偶然に出会う師は、自由な環境がもたらしたものだっただけだ。

4. 和光大学の自由

「自由な研究と学習の共同体」という、今も受け継がれている和光大学の理念には、「自由」という文言が含まれる。制度としてそれを保証するのは、所属する学科を超えた講義をほぼ自由に履修できる、自由な履修制度がその1つである。それによって醸成されることが期待されたのは教養でもあった。和光大学の学修の手引き (和光大学 2016) によれば、共通教養科目群への説明として、「社会的に必要な基礎的な人間力」を養うことを目指したものであり、「将来どんな専門分野に進もうとしている学生もそこで高度の総合的な教養をうけるようになっている」とされている。多くの大学では専門科目が教育目的の中心にあり、その土台として低学年時に多くの教養科目が設置されていた。和光大学では開設当初から、こうした一般教育科目 (教養科目) をすべての学年で履修するように勧め、徐々に専門科目を増やしつつも、最終学年まで教養科目を履修する「通増通減」を基本としていた。1992年の大綱化以降、多くの大学で教養科目が軽視され、より専門科目への比重が増すなかでも、和光大学では共通教養科目として重視しつづけた。

和光大学全体としてみれば、資格課程を重視する学科では必修科目が多く、こうした履修の自由が十分に享受できず、また、年間の登録単位数上限の引き下げによって、履修登録時の選択の自由、さらに言えば登録しても捨てる自由は減少している。そのようななかで、W 学科では必修科目が少ないため、こうした自由な選択による、予想していなかったものと出会う可能性は相対的にはまだ高い。自分の人生は自分で決めたいという志向が強

い学生にとって、こうした偶然の出会いを活かせる環境は重要であろう。同時に、試行錯誤が本質ともいえる。つまり、いくつもの出会いのチャンスをゆるす環境が不可欠と考えられる。

和光大学が大事にしてきた自由は、興味があることを自ら決められる自由であり、もちろん、ただ無責任に何をしてもいいという野放図な自由を意味するのではない。その自由がもたらす受難や弊害については自らが責任をもつという、自己責任に裏打ちされた自由である。「ノーサポート、ノーコントロール」という語句が象徴するように、和光大学は大学当局と学生たちの関係において、ある意味では「ほったらかし」だったと言えるかもしれない。いわゆる「管理」とは対極のやり方である。

しかしどのような自由が求められるか、その自由とは何かということは、大学進学を巡る環境が異なってしまった今、再度問われなくてはならないだろう。母集団から偏っている可能性はあるにしても、今回回答を寄せてくれた W 学科卒業生が自由を志向し、その自由な環境で成長しているのであれば、そうした環境を活かして成長しうる潜在的資質とは何だろうか。

5. 大学改革の動きとL型大学論

著者は現在の和光大学をノンエリート大学と位置づけている。もちろん少数の例外はあるが、全体としては、今後の日本社会の中核となる市民たちが巣立つ場だと考えている。

富山（2014）は、今の日本の労働市場に大きなパラダイムシフトが起きているという前提で、今後の日本経済ではグローバル（G型 Global）とローカル（L型 Local）に分ける視点の必要性を指摘した。実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議（2015）は、大衆化した大学の今後の在り方についても、このG型とL型に区分して再編成し、L型大学はより実務的な職業訓練校化するよう提言している。

今の学生たちは今の世界の中で生きていかななくてはならない。和光大学が創設された時代は、人口は増え、経済は成長し、一億総中流と言われ、バブル景気までの「右肩上がり」の例外的な時代だったのであり、それとは対照的に現在は、人口は減少し、経済は停滞し、格差が拡大する「縮小」社会を生きていくことになる。そうした社会の中核的市民をどう送り出せばいいか、ということが、今のノンエリート大学という場に求められている。ではその答えはL型大学だろうか。

人口の1割程度の「エリート」には、国の政策や企業の方針の決定といった形で、次の世代の形をつくっていく役割が期待される。しかし、国の中核的存在である市民たちは、多様な市民たちのなかで異質なものとどうやって共生する（共に生きていく）かを担いながら、その世代を現実につくっていく。市民として生きていくために、L型大学が目指すような職業訓練的な教育の場は必要かもしれない。しかし、技術とともに、市民たちには異質なものと共に生きていく力こそが不可欠である。そのためには幅広い教養、すなわちそれまでに知らなかった世界に出会う場が、共生を支える広い視野のために必要であり、ノ

ンエリート大学では、とりわけそうした場が求められている。

6. 未分化な18歳に必要な環境―青年期初期に触れる多様性の減少

同世代の大半が高校に進学するようになり、この年齢層の人たちが日常で接する他者の多様性は減ってきた。以前であれば、高校進学者のほかに、就職したり家業を継いだりした同世代の人たちがいた。そのことが高等教育を受けた人たちのエリート意識を生んでいたといえるかもしれない。しかし、多くの18歳人口が、高校までの学校組織における人間関係しかないような現在では、部活動などでの少しばかりの上下関係はあるとしても、それは概ね同年齢の同質な集団での人間関係だけになる。言い換えれば、自らを相対化する対象がかなり均一になっている。

このような環境で18歳人口は高校卒業時に、就職か進学か、進学にしても、専門学校・短期大学・四年制大学のいずれかという選択を迫られることになる。専門学校に進むということは、その時点で本人が自らの適性や人生設計について、見極めができているという前提が含まれる。たとえば看護師であれば、看護という仕事について、適性にそれなりの確信をもって進学を決め、必要な資格を取得する学習を始めることになる。

しかし、それが本当に本人の納得した判断でないと、進学してみてこれは違う、という不適応が生じるかもしれない。人はいずれ何かに分化してそれぞれに大人として生きていくが、当然、不適応によるやり直しも起こりうる。自らの適性に関して、自らを相対視するような模索もなしに簡単に決められる、というのは幻想であろう。そうしたやり直しの試行錯誤を許容する場が、未分化な18歳には必要である。

そこで必要なことは、同年代の同質な他者とばかり接するのではなく、もっと多様な人間関係に接することによって視野を広げるという成熟プロセスであろう。そうした異質な他者との人間関係の経験は、L型大学のような職業訓練を主眼とする大学であっても、是非とも必要であり、W学科の属する学部の前身である「人間関係学部」の名称と視座は、未分化の状態から自らを見定めることが必要な18歳にとって魅力があったように思われる。

7. W学科での学びと進路の例

ある新設学科のアウトカムスタディとしては、卒業生たちの卒業後の生き方がどのようなであり、そのなかで大学生活をどう振りかえるかという評価が最も重要になる。本稿で示したW学科学生たちの価値観の「傾向」はあくまで集団の平均的な状況であり、ひとりひとりをみれば多様である。ここでは、卒業生とのインタビューのごく一部を紹介し、今後の手がかりとして示しておきたい。W学科が理念としてかかげている「共生」がどのように影響を与え、かれらの生き方にどのように顔を覗かせているか、前述した「未分化な18歳」の成長という視点で抜き出してみる。

1) 卒業生A——ひとりひとりを大切に

卒業生 A は、保健体育の教員になることを夢見て入学し、同期の仲間のなかでも愛される元気な学生だった。以前から続けていたスポーツの団体が和光大学に存在せず、部員 1 人の部を創設して対外試合に出場するなど、「自分のやりたいことは自分で模索する」行動力が目につく学生であった。この卒業生 A の印象に残った授業のひとつに、障がい者を対象にした「ムーブメント教育・療法」があり、保健体育教員は目指しつつも、そうした広がりも学んでいった。転機は教職課程における介護等体験実習と教育実習での体験にあったという。保健体育教員としての実習は、とりわけ体育実技の場面では、教師 1 人が 2 桁の人数の生徒に対して号令や指示をしなくてはならない場面がある。もともと、そうしたいわゆる体育会系的な構造に違和感を覚えていたらしいが、そうしたなかで障がい者施設での介護等体験実習があり、短期間ではあったが、少数の要支援の子どもに対して教師が個別の状況を考えつつ密に対応できる場に接したことで、その世界との相性の良さを感じたという。保健体育教職資格を取得した卒業後は、非常勤で特別支援の教員をつづけつつ、教員採用試験に挑戦して合格したが、このときには保健体育ではなく特別支援での受験をしていた。この卒業生 A の場合、同じ教職ではあっても、入学時にはそうした将来像はまったく想像していなかったと言う。本人は「共生」という抽象的な概念にさほど関心はないのかもしれないが、子どもたちを育てたいという気持ちを保ちつつ、ひとりひとりに大切に接したいという形で見極めた進路を見つけた事例であろう。専門学校ではない大学が、偶然の出会いによって「想像していなかった自分に出会う」役割を果たしたといえるかもしれない。

2) 卒業生B——異質を知る・俯瞰する

高校生時代から周囲は英語能力の高い環境にあり、同級生たちが留学などをするなか、高校の教師から和光大学を薦められ、本人も和光大学に来てみて、自由な雰囲気、ここだ、と直観したらしい。本人の英語能力は高いのに、初級クラスの英語の授業に配置されたにもかかわらず、他の学生たちが未熟ながらも熱心に英語に取り組む様子を面白がるような柔軟性をもっていた。さまざまな授業を受講し、和光大学の履修の自由を生かして、未知の世界に触れることを積極的に展開していた。しかも、そのときの講義ノートを卒業後の今でも読み返すという。授業は真面目に出ていたのに、周りの仲間から「出たの?」と問われることもあったというのは、講義では教室全体を俯瞰していたかったから、後ろのほうの隣に人がいない席にひとりで座っていたからだという。一方で傾倒している趣味もあり、低学年のころは複数のアルバイトをするなどしたうえで、その趣味に関係した職場でも働き始めていた。教員からみてこの卒業生 B が目立ったのは、4 年生の秋に、W 学科が連携を始めようとしていたピースボート世界一周の旅に、書きかけの卒論をかかえつつ、単身で参加したことである。現在は少なく感じられる「知らない世界を見よう」という姿勢がうかがわれ、学科の授業でピースボートの紹介というきっかけがあったにせ

よ、具体的な行動に移したのは、本人の生来の気質もあるようだ。帰国後、客観的には武勇伝に感じられる体験談も、本人のなかではどこか客観視している雰囲気もあり、そうした世界をメタに見る力ももともと備わっていたのだろう。本人にも「自分は変わっている(人と違う)」という意識はあるようだが、教員としてそれを感じたのが、自分の趣味に合致した就職先を決めたときに、「その業界がブラックだとわかったから、一度体験してみよう」という理由もあった、という話だった。常識的にみれば、本人も保証人も、もちろん教員も、それはふつう避けるべき要因と考えるだろう。むろん、本人に生きていく力への基本的な自信があり、実際、英語も含めてその能力があつてのことかもしれないが、W学科のなかでは例外的ではあつても、こうした個性 (Nature) には、和光大学という自由な環境 (Nurture) が適していたと考えさせられる事例であつた。

3) 卒業生C——情に生きる

卒業生Cは、高校までスポーツ好きではあつたものの、とくに保健体育教職資格を目指して入学したわけではない。人に嫌われるようなことは少ない性格で、友人は多そうだったが、ゼミなどの場でも、率先して引っ張って発言するというより、人望によってゼミ長に推薦されるという人柄だった。本人の言葉で印象的なのは「オレは普通に生きたかったんです」というものだった。人を押しのけて出世したりするような意欲はなく、穏やかな普通の暮らしができれば十分で、それが可能なら大学進学が絶対不可欠とは考えていなかったようにも見えた。正直なところ、和光大学でなくてはいけないという必然性は、教員の目からしてもあまり感じられなかった。就職先として高齢者介護の会社に決まったという話も、卒業前後に聞かされて、適性についてはその時点では教員にも判別できなかった。W学科は福祉関係の資格が取れるわけではないが、現状では毎年、複数の卒業生がその方面に就職している。働きながら資格取得も可能で、現在の日本社会での需給関係からすれば、今後も卒業生たちが選択する分野だろう。この卒業生Cなら、そつなく仕事はできるだろうとは確信していたが、どのくらい生きがいを感じながら仕事に取り組めるかという点に関しては、本人が多くを語らなかったので未知数であつた。しかし、就職後の変貌は目覚ましかった。ともすると、死を迎えるまでの、現状維持なら上出来と考えかねない高齢者介護の現場において、その仕事を「楽しい」と言い切るようになったのである。無論、仕事の性質上、入所者の死という悲しい場面は避けられないが、日常では現状維持に満足することなく、自分にどこまでできるのかを少しでも多く考えることに目を輝かせて語る雰囲気は印象的だった。この卒業生Cが在学中に、元気だった祖父が急逝されて、じゅうぶんなお別れの時間がとれなかったことも関係があるように語っていた。親しい人との別れには悲嘆のケア (grief care) が必要とされるが、卒業生Cにとっては、介護という仕事が、祖父との別れの追体験となりそのケアになっているのかもしれない。この事例では、W学科のカリキュラムや学内での行事が直接の進路決定には影響していないかもしれない。しかし、特別な人ではなく普通でいたい、という人材にとって、W学科に「これこ

れにならないとダメ」というような絶対的枠がないことが良い方向に働いた事例と言えるかもしれない。自分の適性ややりたいことが明確で、そのために資格が必要なら、おそらくそのための専門学校に進学するほうが近道であり無駄は少ないだろう。しかし、この卒業生Cが高校卒業時に福祉の専門学校に進学していたほうがよかったかといえ、そうではないように思われる。祖父が亡くなるタイミングという偶然もあったし、教養的な大学に在籍していたことは「知らなかった自分を発見する」場として役立ったかもしれない。実際、他の卒業生たちにも、看護師、理学療法士、言語聴覚士など、四年制大学を卒業した後にさらに専門学校に進学している事例がある。それを可能にするには、学費という財政的壁があるものの、そうした卒業生たちはそれぞれの分野で、間違いなく高い確率で生き活きと力を発揮している。

これはわずか3名についての概要であるが、入学時には明確な進路を考えていなくても、あるいは一定の希望があったとしても、偶然の出会いによって自身が変わることへの抵抗感は少ないように思われる。自由が尊重される環境を経て成長する学生には、その自由への敬意と、異質な他者とのコミュニケーションによって得られるものの内面化にしっかり取り組める資質が共通しているように思われる。ある卒業生が「和光大学では自由だった、というより、自由がつきつけられた。おかげで、自分がどうするのかを自ら判断する力がついた。エリート大学を出た人たちは、卒業後に一流企業に勤めていても、30歳くらいで迷う」と口にしていたことは印象深い。自分が何をしていくのか、青年期には、模索し、じゅうぶんに腑に落ちるまで考えたり、体験したりする必要があるだろう。そうした場として、専門学校ではない大学の場合は意味があるのではないだろうか。とすれば、ノンエリート大学がL型大学を目指すべきだとしても、そこには専門学校にはない《予想外の出会い》の要素を残すことが重要だと考えられる。

8. 「ふところ力」を開花させる場として

本論文で考えていることは、煎じ詰めれば、エリート育成大学ではない大学はどうあるべきか、ということである。

これまでも、現役学生たちが非専門家として異質な他者との集団のなかで活躍している事例を示してきた（野中 2011）。さらに、エリート大学に進学した《選ばれた》学生が「競生力」に優れているのに対して、ノンエリート大学の《選ばれなかった》学生のほうが、選ばれなさの多様さを理解し、受容し、より優れた「共生力」をもっている可能性を指摘した（野中 2014）。そして、大学生活のあいだに脱皮するように大きく成長した学生の事例に共通していたのは、「教室外にいる異質な他者のふところに飛びこんでいく」場面ではないかと注目している。

著者はこのことをあらためて「ふところ力」と呼びたい。上述の卒業生3名にもそれぞれ別の形で認められる。ただし注意が要るのは、その行動の根源にあるのが、恵まれない

異質な他者のために奉仕しようという無私の気持ちというより、基本的には被承認欲求の現れであったことである。つまり、ここで考えているのは、異質な他者のふところに飛びこんで認めてもらうという行為ということになる。ふつうは「ふところが広い」といえば、清濁併せのむといった度量の大きさを意味するが、ここで「ふところ力」というのは、そうした度量のことではなく、異質なものに対して、排除や敵対でなく接しつつ認められる力を指している。

9. 研究の限界と今後の課題

今回、価値観調査のために分析に用いたデータは、想定している母集団全体を推測するには大きな欠点をかかえている。ここで得られた割合や平均値が、W 学科の全体に関する頑健な推定値でないことは明らかである。相対的に学科の教育に好意的な卒業生たちが偏って多く回答しているという選択バイアスがあるし、今回は用いていないが、遡及的に学生時代を評価したデータには、想起される記憶が、卒業後に時間が経つにつれて、悪かった内容よりも良かった内容に偏るという情報バイアスもあるだろう。したがって、今回の結果が、W 学科の全体像をつかんだものだと考えるわけにはいかないし、そもそも学生集団の特性は年次ごとにも流動的なものであり、実際、現在の W 学科在学生には初期の学生と比べて変化している可能性も示唆された。

偏りはあるにしても、和光大学という環境を活かした才能たちの評価を検討することは、根本の問いである「どのような資質が和光大学という環境に向いているのか」という問いに対する答えを探る第一歩にはなると考えている。もちろん、そのためには、和光大学という環境に向いていなかった学生たちの情報も必要である。性別はもとより、保健体育教員志望者、教員志望を進路変更して一般就職した者、正社員を選ばない生き方を目指す者など、こうした属性によってどのように異なるかも興味もたれる。

究極的には個別に問う必要がある。このほか数十名の卒業生にはすでにインタビューを実施し、吟味に値する事例は少なくない。今後もさらに卒業生たちのその後は調査していく予定であり、すでにインタビューを行った卒業生でも、さらに 5 年後、10 年後にどう育っているかも興味深い。大学という環境の意義は卒業後すぐの就職状況だけで計れない。生き方の軸をうまく見つけられたとしても、それが表に出てくるには、ときに時間がかかる。大学のアウトカムスタディには長い時間軸で評価することも求められるし、とりわけ和光大学ではそうである。その部分は、今回はまだ考察で短く触れるにとどめざるをえなかった。今後もさらに追究していきたい。

《引用文献》

OECD (2016) 大学進学率 (四年制大学) 日本 (Japan)

資料 : GLOBAL NOTE (<http://www.globalnote.jp/post-10165.html> 2016.11.6 取得)

World Values Survey (1981-2010) (<http://www.worldvaluessurvey.org/WVSCContents.jsp> より以下を取得)

f00002580-wv1_results_japan_1981_v_2015_04_18.pdf

f00003017-wv2_results_japan_1990_v_2014_04_18.pdf

f00003967-wv3_results_japan_1995_v_2015_04_18.pdf

f00002504-wv4_results_japan_2000_v_2015_04_18.pdf

f00001520-wv5_results_japan_2005_v_2015_04_18.pdf

00001455-wv6_results_japan_2010_v_2016_01_01.pdf

安藤寿康 (2014)『遺伝と環境の心理学：人間行動遺伝学入門』、培風館

石原静子編 (2001-2002)『自分らしくのびのび生きよう：こんな先輩たちがいる (1～5)』、石原静子個人出版

梅根悟 (1975)『小さな実験大学』講談社

実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化に関する有識者会議 (2015)「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の在り方について (審議のまとめ)」

(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/061/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2015/04/15/1356314_1.pdf 2016 年 11 月 6 日取得)

富山和彦 (2014)『なぜローカル経済から日本は甦るのか：GとLの経済成長戦略』(PHP 新書)、PHP 研究所

マーチン・トロウ著 (天野郁夫、喜多村和之訳) (1976)『高学歴社会の大学：エリートからマスへ』東京大学出版会

M. トロウ著 (喜多村和之編訳) (2000)『高度情報社会の大学：マスからユニバーサルへ』玉川大学出版部

野中浩一 (2010)「共生」は「学」なのか 和光大学現代人間学部紀要 3: 263-265

野中浩一 (2011) 小さいけれど「ノイラートの船」かもしれない：共生「学」なんて知らないよという学生たちの不思議な力 共生科学 2: 51-64

野中浩一 (2014) ユニバーサル化時代における大学の意義：異質性が高める学生の共生力 和光大学現代人間学部紀要、7: 177-194

和光大学 (2016) 学修の手引き 2016 pp.44-45

謝辞：在学生アンケートにあたって、和光大学の複数の専任教員に、貴重な授業の一部の時間を割いていただきました。感謝してお礼申し上げます。そしてなによりも、分厚い質問紙調査に協力していただき、さらには個別のインタビューにも応じていただいた W 学科の卒業生諸君に心より感謝いたします。

——— [のなか こういち・和光大学現代人間学部身体環境共生学科教授]